高山の文化を高めた人々 49

桃源郷への想い飛騨百景 纐纈 敏郎

纐纈 倫子

光陰矢の如しと申しますが年月の流れも然り、夫の纐纈敏郎が二〇〇二年の春、六十二歳で他界してはや九年になります。遺族として、五里霧中のなか、仕事や作家活動に明け暮れた日々でした。無事に今日までやって来られたのも周囲の方々に支えられての事と感謝しています。

夫の画家としての人生は三十六年間でしたが、常に強烈なロマンを求めフットワークよろしく多彩な展開を続けてきました。

一九四〇年に名古屋の大須に生まれ、少年時代はゴッホに憧れて画家への道を夢みたそうです。

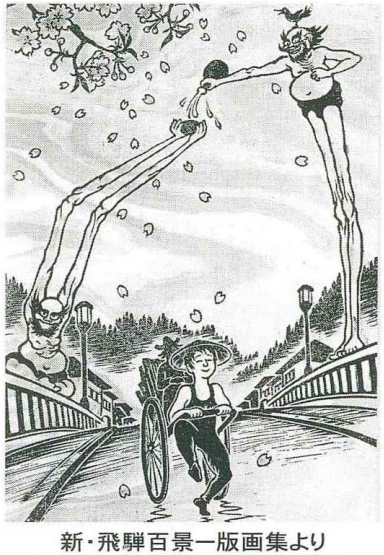
やがて成人となって、美術評論家の滝口修造著「近代芸術」に感銘し、描きためたデッサンを百枚近く抱え、リュックには緊張を解く為のウイスキーをこっそり忍ばせて、誰の紹介も無く東京の自宅を訪ねたそうです。滝口先生は纐纈の異様な人物デッサンに注目し、その場で個展を勧められたそうです。その後、東京での個展が続き、私との出会いもこの頃で先生の媒酌で結婚しました。

数年後に、東京の某劇団との関わりがあり、暫くは舞台美術を手がけていました。例えば、纐纈は「因果応報」の芝居絵（八m×二m）を七枚余り制作、私は観音堂など共にかつて無かった経験をしました。さらに纐纈は二年がかりで描き上げた大絵巻「現代の地獄絵・人間とは何か」（全長百m×幅二m）を名古屋にて一般公開。人間の煩悩や業をダイレクトに描いた鮮烈な絵巻物でした。NHK教育テレビ・文化シリーズ「闇への凝視・現代の絵師纐纈敏郎」が制作放送されたのもこの頃だったでしょうか。

一九八八年、高山市に飛騨国際工芸学園が設立され、その開校に伴い私共は招聘されて、名古屋から新天地の高山に移転してきました。纐纈のトレードマークの帽子は相変わらずで…。

開校して二年目のカリキュラムに採り入れた巨大絵巻（百m×二m）は、激動の時代「昭和」をテーマに、主任教授の纐纈を軸に教師と学生達との共同制作で進められました。単に歴史の記録にとどまらず、人間の深層の闇と光を際立たせた絵巻で、一般公開の展示は高山を皮切りに、名古屋、東京、京都等で行われました。通常の美術展と異なるのは来場者の方々の間で次々と会話が生まれてくる事でした。それぞれに昭和の歴史の節目に思いを馳せ、例えば大戦中の疎開先での体験談など、走馬灯のように色々と記憶が甦ってこられるのでしょう。翌年の一九九〇年にも同じく巨大絵巻の二作目「人類世紀末」が完成。初公開はベルリンの壁崩壊まもないドイツで展示されました。

二十年後の現在、社会人になったかつての学生さんは当時の授業を懐かしんで、「絵巻を指導する纐纈先生の鷹の如き鋭い眼差しと、厳冬のさなかの熱い緊張感は忘れられず、絵巻は大切な若き日のモニュメントになっている」等と語ってくれます。



新・飛騨百景一版画集より
「鍛冶橋・手長足長のお花見」木版画

さて、長年人間をテーマとしてきた纐纈は、都会から高山に移り住んでから風景を描くようになりました。飛騨ならではの自然界の豊かな喜怒哀楽の季節感や、伝統行事などの風物詩に感動し、それらのモチーフを版画にしたのが「新飛騨百景」です。作品は二か年に亘り岐阜新聞に連載。纐纈は以前から飛騨に憧れ「桃源郷」と呼んでいただけに、スピリチュアルで情感豊かな版画集となり、二〇〇二年の春にNHK出版より刊行されました。

実は当時、主人はいのち水？（酒）が祟ってか末期の肝臓癌を患い闘病中でしたが、有志の方々のご支援で『夢嵐・新飛騨百景』と称した出版記念パーティーを開催。多くのお客様の前で車椅子のままで感謝の挨拶をさせていただきました。しかしそれは生前葬となり、まもなくあの世に旅立ってしまいました。

作家にとり死は人生の通過点、作品のなかで更に生き続けることでしょう。纐纈は私にとり今だ刺激的な存在で、娘達も父親とは魂の深いところで繋がっていると…。お陰で数々の遺作からパワーをもらい日々励まされています。